

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 73: 80-115
Issue date	1899-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5361
Right	

雜 報

天恩優渥

いはましくもかしかれども、我が 大君の 大御心を深く軍事に注がせ給ひ、はた 大御心をいたく教育にかけさせ給ふ御事は、我等臣民たるものゝ常に心に銘して、かしてみまつれる所にしあれど、折にふれ事につけて、いとも感涙に咽ふことの屢なるぞいとも畏さや。

さつき頃、出京中の各高等學校長はからずも、畏きわたりより、是迄たぐひなき 大御恩の露に、一同袂をうるはえて、天恩の優渥なるに感泣を奉りし由承りぬ。去ぬる四月十三日には、在京の勅奏任の諸官とひとしく、濱離宮の觀櫻の御宴に列ることの光榮を蒙りまのみならず、同十七日には特さらに 宮中に召させられ、午前十時三十分鳳凰閣にて 拜謁を仰付られ、同廿三日にはまた、御苑内なる振天府の戰利品拜觀を仰付られ、岡澤侍從武官長して町嚙に説明せまめさせ給ひ、終りて御菓子を下させ賜ひき

とぞ。あはれ 天恩の優渥、われらこれを何にかたどへ申さん、久方の天も低きが如く、あらかねの地も狭き心地ぞする。

伏して 勸慮の程を察せ奉るに、かの日清の役、我が大捷を得たるも、國民の精神教育によれば、國民の精神教育は、一日も苟にすべきにあらず、教職にあるものゝいよく勉め勵みて、邦家に盡す所あれ。どのいとも忝き 大御心に出でさせ給ひしにこそあらめ。五月十三日、我が職員生徒、一同雨天体操場に集ひて、吾校長の涙ながらに縷述せられま、忝き 勸慮のほどをかえこみて、覺せず袂をうるはえ、天賜の御菓子を拜して、更に感涙にむせび侍りぬ。

いにまへにありともさかす大君の

めくみの露のかゝるためまは。

謹んで送り謹んで迎ふ

前雜誌部長黒本教授の其の任にあるや、事を處する慎重、よく委員等を誘導して、我部の爲に計らるゝこと、實に鮮少なからざりき。然るに教授はさきに舎監の任を兼ねられ、事務多端の故を以て、部長の任を辭せられぬ。けたま、教授

のこの任を辭せられざるものは、一方に於て舍監の任を忽にせず、他の一方に於て、部長の任を重んぜらるゝの意に出でざるものならん。吾等眷戀の情に堪へずと雖、先生の決心、動かすべきにあらずれば、又如何ともする能はざるなり。されど吾等は、今や兒島教授を推選してその承諾を得たり。教授の博學多才は、吾等が夙に聞きし所又知る所なり。教授の我部に貢獻せらるゝ所、けだし又大ならん。さきの長部長につぐに、今の賢部長を以てす。嗚呼我部の幸福亦大なるかな。謹んで送り、謹んで迎ふ。

因に記す、黒本教授、部長の任を辭せられしも詩歌文章の如きは、従前の如く、先生の斧正をうけ、又事にふれて、先生の注意誘掖を忝うすこれ吾等が先生に向つて深く謝する所なり。

豫 錢 會

吾等が敬愛せる三年生諸氏が、卒業の名譽を双肩に擔うて、吾校を去らるゝ、將に旬日を出でざらんとす。よりて、五月廿七日、午後より、吾龍南會は、其豫錢會を、雨天体操場に於て開きぬ。旅衣たつたの。山の麓、すみなれし白河の邊、あは

れ、かたみに送り送らるゝ、同窓七百の學徒が、此日の思やいかに。たち別れゆく袂の露のいとしげき、別れのつらさか、いや深き學の林に、分け入らんとする人の、門出の義まきか、杜鵑血に啼く初夏半日の會同、喜悲並に到る、我健兒の思やげにいかなりけん。

午後二時、亮々たる喇叭の聲につれて、主客席定まるや、中川會長、諸先生と共に臨場あり。森田總務委員先づ立ちて、開會の辭を述べ、次て中川會長より、三年生諸氏に對する、懇篤なる訓論あり。其要に曰く、

諸子、今や、多年の辛苦勤勉の功、茲に表はれて、卒業の榮譽を得る、數旬の内にあり。諸子の境遇や、眞に喜ふべし。此時に際し、吾はた何をか云はん、唯希ふ所は、諸子が此校を去りて、大學に進むの後も、此龍南の學舎を忘れず後進誘導の道を盡されし事はなり。且つや方今日進月歩の活動を現する學海に掉して、時勢の潮流に後れず、社會進歩の先導者となり、以て吾校名を辱しめざらん事、吾が切に望む所也。由來我九州の地、僻遠の地に位して、

屢々中央社會の進歩に後る、されど一方にありては、都門浮華の風に染まず、質朴に於て剛毅なるの長所あり、願くは勤勉以て前の短所を補ひ又かの長所を失はざるべき也。從來の成績に考ふるに、吾校出身者は、他校のに比して、好成績と云ふ可からず。諸子夫れ勉めて、吾校名を辱むる勿れ。

と淳々と云て戒むるが如く、論すか如く眞に嚴父の愛兒に對するの情なり。滿堂襟を正して傾聽せぬ、右終りて工學部總代中隈伊勢吉君一部總代山形元治君三部總代大谷重治三部總代阿部實作君及び文科二年三澤糾君の送詞あり或は白水の行きて歸らざるを觀えて訣別の悲を叙するあり或は成業の功を、蘇山の高に比えて、以て前途を祝するあり。或は龍山の松嶺に托えて、修身の規を呈するあり。かくて送別の辭終るや、法科三年今北策之助君は、立ちて壇に登り三年生一同に代りて、答辭を述べらる。曰く

吾等此校にある、茲に數年、今や幸にして卒業の榮を得んとす、これ唯諸君の幫助によるのみ、尙將來と雖、從來の如く相提携して、學海

の狂濤に棹さん。

と、辭卑しと雖も、誠意を片言の中に寓す。吾等後進の徒、豈に奮勵えて、諸氏の後に繼かざらんや。

式終りて、能狂言の余興數番あり、盛を極めて散會せ乏は、己に午後六時。淡靄遠く金峯の頂を罩めて、歸鴉數點、蒼穹に消ゆる頃なりき。

弓術部春期大會

弓術部春期大會は、五月十四日、圖書閱覽室の南事務室の西北、一群の松樹綠々たる所に開かれぬ。時恰も午前十時、日光松の梢にれどづれながら、露未だ全く乾かざる時なりき。生駒師範東先生は武德會に臨場せられ、こゝに臨まれざり乏は一同の遺憾とする所なりき。來臨の人々には杉山部長、園、大平、嶋野の諸先生新委員板井、今井の二君より納富、平田、山口、内藤、磯、岩田、丸山、深見、戸澤、鬼、常吉、大木、稻川の諸君なりき。先づ第一に遠的を射る。高く金峯の頂を睨ひて、猶箭の的の前に落つるものは、弓弱ければなり、引手のたらざればなり。低くねらひて、猶高く虚空を飛ぶものは、弓強ければなり、引手の過

ぎたればなり。前に出で、後によるものは、風あ
るが爲め、はた射る人の罪か。高さ程よければ前
後にすれ、筋よえと見へば上下にはつる、されば
コツリと細き竿をうちて、はねかへるはあれど、
美事に的を射ぬくものはいと稀なり。遠的終る
時はや亭午を過ぎたり。これより扇の的にうつ
る。

まづ、第一に園先生たちたまひえが、矢は少ま
く上にはづれぬ。續いて立ちたる平田、山口二君の
矢は少ましく高く前に出でぬ。大木君の矢は、少ま
く低くて後にすれぬ。大平先生の矢は高かりき。
常吉君のは後にはづれたり。次ぎて出でたるは、
これぞ名にれふ内藤君、よくひいて、放ちし矢は
おやまたす、紅の日輪を、少ましくよきて、左の上
方を射たり。されど、こゝは龍田の麓、屋嶋の浦
にはあらねども、喝采しはしは鳴りもやまざり
き。

これより、運動場の南なる教員射場にて、金的の
競射は行はれぬ。校長來臨せられたり。まづ第二
に立ちたるは、磯君なり。あはや中りぬと思ひじ
が、少ましく的をはなれぬ。皆競ひて射けれども、

あたらず。又も番は磯君にまはりえがまた縁に
あたりぬ。三立目なりけん、金的は遂に磯君の手
に落ちぬ。

それより、三組に分れて、八寸的の競射をなすも
の數回、負組は「はひ」と定められぬ。いづれの組
なりけん、負けたりえは。校長まづ立ちて、はひ
たまへば、生徒もせん方なく、匍ひたりしこと。

れかしかりえか。組をかへて又射たるに又も校
長の加はりたまひえ組は、美事に打負けぬ。され
ど、校長は二本とも、美事に射てのけられたれば
此度は免れたまひぬ。校長の得意思ふへえ。他の
ものどもは又もぞろ／＼とはひぬ。されば、二
度まではひしものもありて匍はぬは二人三人に
は過ぎざりき。「中り」の數に應じてくじをひか
えめ、れもしろき福引などありて、五時頃散會
しぬ。

弓術部射納式

五月三十一日、弓術部射納式を、校の東北松林の
裡に行ふ。來臨の人々には、生駒師範をはじめ、
東、余田、園、嶋野の諸先生、生徒には、板井今井
の兩委員、納富、平田、磯、内藤、山口、若田、相良、

戸澤、常吉、大木、稻川、川端の諸君なり。八寸的の分附をなせ、一等より十等まで賞品を授與せたり。一等今井、二等園先生、三等山口、四等生駒師範、五等嶋野先生、六等岩田、七等戸澤、八等余田先生、九等相良、十等東先生なり。納富、平田、板井の諸驍將如何なる故なりけん。皆結果悪く、殊に内藤君のせりなり。是は、頗る妙なりき。それより、組を分ちて競射、負け組は『匍ひ』と定まり最初の立は、射かけ二組ありて、漸く匍ふことは、やめとなりぬ。二立目には、生駒師範の加はり玉ひし組は、不幸にも罰則にふれぬ。先生まづ起ちてはひたまへば、五名六名、ぞろ／＼とはひたり。是は、先日大會のをりに、校長の匍はれ。と好一對、をかゝかり。事なりけり。漸くにして日既にいたく傾きたれば散會す時恰も午後六時半なりき。

左に載する所は、敢て、この會に臨む所の諸士に當らざる所なれど、部員外にきて、往々弓を翫弄物視するものなきに。まゝあらざるを以て一言こゝに附記す。

今や飛丸時を得て、弓箭すたれたること既に久

まど雖、昔時にありては、これ實に武夫の、唯一の寶なりき。武夫の精神は、實にこれに籠りたりき。宜なる哉、今の世に至るも、猶この道を修め、古の武技と精神とを後世に傳へて、永く廢することなから。まめんと力むること。弓を射るに、体まづ正しからざれば、則ち中らず。心まづ靜ならざれば、則ち體正しからず。古人が、其の外射を見て、其内徳を觀るべし、といひけん、誠に吾人を欺かざるなり。孔子曰く、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升、下而飲、其爭也。君子、と射の神髓とする所は、其的に中るにあらず。まて、其禮、正なきにあり。今や禮漸くすたれたり。坐作進退さも節にあたれるもの殆ど稀なり。只ひきては放ち、放ちてはひき、体の正しきや否やを考へず、心の靜なりや否やを思はず、只的に中らんことをこれ望む、何ぞ中る理あらんや。体少しく正しからざれば、一分の差は以て三尺の差を生せん。心少く靜ならざるあれば、体も亦自ら正しからざるなり。射を習ふもの、宜ましくまづ、其心を正うしせよ。心正しければ、体も亦自から正まらん。體正しければ、矢も亦必らず正鵠を貫かん。體を

正うま、心を正うするの事は、初心のよくし能はざる所、心を用ふること久まきに至らば、以て能くこゝに達せん。かの袴を着せずして、弓を射るが如き痴漢に至りては、亦到底論すべきにあらざるなり。

野球混合試合

福陵の奇捷は既に三年の昔となりぬ、以來當時の撰手多く既に校を去りて後進の士意氣尚昂からず、野球部衰頹の聲は到る所に聞かれ當時關西の野球界に隱然雄を稱したる龍南の健兒も今や殆ど孤城落日の觀なきを得す心ある者をして運動場裏草徒らに滋きを嘆せしめざるものも幾干ぞされど盛衰興替は時勢變遷の常態にや、此頃に至り機運の此方に向はんとするか如く時には武夫原頭ハットを揮り球を飛ばして日の没するを知らざるものあるを見るに到れり且つやさきに四月委員の改撰ありてより新委員諸氏頗る此技の爲めに奔走きて先月中には數回の練習あり其の結果終に五月十七日師範濟々兩校撰手と混合試合を見るに至りぬ此日恰も擊劍部に於ては紅白勝負の催あり憂々の音と丁々の聲と相競う

て龍南天地數月來の歳莫を破り實に吾校近來の盛況なりき

此日師範校の撰手七人濟々中學三人而きて吾校より出て去者八人其部署實に左の如し

白組 P 磯

C 戸澤

SS 河野

I.B 池田

II.B 關(中)

III.B 相良

C.F 高妻(師)

R.F 有田

F.L 高橋(師)

赤組 P 高橋(師) C 友添(師) SS 丸山

I.B 大井

II.B 福嶋(中)

III.B 寺田(師)

C.F 松崎(師)

R.F 谷口(中)

L.F 中山(師)

回数	赤	白
I	3	5
II	1	2
III	1	0
IV	2	5
V	0	2
VI	4	0
VII	2	3
VIII	0	5
IX	1	2
sum	14	24

午後一時三十五分部署已に定り戰は將に開かれれんとす第一回白先つ攻勢を取り赤守る見渡せ

は師範校の勇士の、高橋氏球を握んで中央に屹立せ、其後にの要害を固めたるは吾校の耆宿曾て福陵にチャンたりと丸山氏也此他の太井氏を始め師濟兩校の勇士の面々綺羅星の如く野を分ちて守り士氣慘として驕らず靜かに審判者の命を待つ、自軍先登として磯氏進みてホームに登り悠然バットを握つて隙やあると敵陣を見渡す様敵に孔明八陣の略あらば吾に張飛坂橋の勇あり縦横に駆け散らさ呉れんと云はぬ計りの景色あらはれて勇々とも勇々審判者杉村氏美髯を撫えてプレーの號令を下せば戦は茲に始まり唯見る熱球騰々としてホームに飛ぶを磯氏屢々打ち損えてフワウルを飛ばせよかボール盡きて難なくLBを取る之より戸澤河野二氏相次でベイスを奪ひフルベイスとなるや池田氏一揮フライをCの後十數間の處に送りて一時に磯戸澤を、田に歸し關氏立つに及び河野池田の二氏も隙を狙いて歸り來り相良氏高妻氏一壘に死し有田氏三壘を奪んどきて失敗せよより赤代り攻め白は一舉五點を得たり白軍部署を定めて諸壘を固むの磯氏赤軍の高橋氏に比すれば力に於ては

或は一步を譲るも舉止敏捷なる點に至りて彼を援く一等球亦雅麗にして機を見る事頗る敏なるが如き、の河野氏一の池田氏共に好對の名手と聞く、の高橋氏は師範校の勇士フライを握むに巧みなりとは後に知られ諸塞又錚々の名ある者のみ也亦よりは高橋氏先つ出て、に立つ得意のフライをCとEの間に打ちて一壘を取り友添氏屢々左方にフワウルを打ち、の隙を見て之を襲ひ奇功を奏せ丸山氏亦飛球を外野に飛えて高橋友添二氏を歸らしめ福嶋寺田松崎の諸氏相次てフライに死せしより第一回終り赤軍は三點を得ぬ。第二回磯氏一壘に危く死せんとせよも辛うして助りしも戸澤氏のに打ちし球の爲め三壘に斃れ池田氏例の飛球もて戸澤氏河野氏を歸せよも相良關二氏一壘に打死するに及びて犠牲となりて立往生得る處二點赤軍代るや谷口氏先づ一壘に死し中山氏一點を得て丸山氏フライを敵の高妻氏に取られて友添氏をスタインタラせめぬ得る處僅に一點差三點となり赤軍氣沮む。第三回亦の高橋氏スウ井フトを弄えて屢々敵を苦めり高妻氏はフワウルを大

井氏に握まれ有田氏三度振の醜を演じ高橋氏三壘迄迫りしも磯氏一壘に斃れて立往生となり得る處なし赤軍代るや敵の一點も得ざるを見て回復せんとせざる福嶋氏デットボールにて一壘に入りて後一點を得たるのみ差は尙二點。第四回は白の大飛躍を爲せし時にして一舉五點を得赤をえて殆ど回復の望を絶たしめたり戸澤氏先つ立つやエロを以てを衝きて一壘を乗り取り池田河野二氏相次て疾風の如く諸壘を陥れ關氏のデットボールを利え相良氏フライを敵の丸山氏に取られざる高妻氏かのボールにて進むあり傍若無人殆ど底止する處を知らざる有様なりまか高橋戸澤二氏の三度振りにて漸く喰ひ止たり。赤軍代るや小兵ながらも敏捷猿の如き谷口氏突進えてホームに入り高橋氏の大飛球の後の數十間の遠きに達せしも後に續く者なく僅に二點を得て差は五點に進みぬ。第五回例の河野氏池田氏能く戦ひて二點を得るか赤軍はホームにて赤軍の形勢愈々悪き、第六回白軍は高橋氏先つ三度振りに斃れ磯氏フライを谷口氏に取られ河野氏又フライを谷口氏に得られて戸澤氏

は二壘に立往生、赤軍は此機に乗えて回復の志を達せんとて丸山太井福嶋寺田の諸氏大奮戦をなし終に四點を得たり然れ共差は尙三點也。第七回赤軍前回に於て大に奮戦せし結果差減えて三點となる白軍亦大に戒むる處あり池田氏の一壘に據りて二壘を襲はんと企つるや高橋氏屢々球を大井氏に投じて試みしも功を奏せず白軍終に三點を得赤軍は數えて進みざるも二點を得三人の立往生を生せしめざるのみにて回復の志遂に成らず差は進みて四點となりぬ。第八回白軍勝に乗えて右を衝き左を薙き一瀉千里の勢をもて河野關相良高妻高橋の五氏相次きてホームを奪ひしかば赤軍益々顔色なく代りて攻れども得る處なき。第九回勝敗の數は殆ど定りぬ差は九點に達せ而して更に二點を加へぬ赤軍攻めざる得る處僅に一點、審判者茲にゲーム終るを告げ、勝敗は十點の差を以て白軍の勝に歸しぬ。時正に三時五十分。思ふに當日の試合二十四に對する十四とは其好成績に非るや勿論なりされど一年間の休止と僅かに一二回の練習後の試合とをては頗る多きと

せざるを得ざる也。

左に記するは局外傍觀者の岡目八目的私言なり
敢て肯綮に當ると云ふに非ず。

一、打手一度走者の身とならば其職務は唯諸壘を陥れてホームに歸るにありされば苟も機に乗すべきあらば勇雄突撃を以て一時も早くホームに近寄らんことを謀るべく喧阻逡巡は走者の大禁物なりかの時に險を冒きて壘を襲ひ時に狭撃の苦戦に會ふも又一快事ならずや遅々と云てベイスに固着し立往生の醜を演するより勝る事數等。

一、キャッチと二ベースとの連絡全く通せざりし様なるは如何、且つキャッチか二ベースに投する球は到底彈道のある球にてはダメなりと思ふ如何。

一、フライ多くてゴロ少きは如何、こはノックの弊害に非ずやと思ふフライの高く天に冲するは氣味よきものなれど狂奔脱兎の如きゴロの奇功を奏するには如かず

一、球を取つて投ぐる迄時間を取るは非常に不利益なる事なり平素練習の時球を取るや否

や直に投げ返す姿勢に移る稽古をなし置かば非常によからんと思ふ如何。

一、白軍の投手磯氏投球頗る麗雅、進退節あり、而も球甚だ強からずして且つ常に高きに失するは遺憾なり敵をして屢々フライの奇功を奏せざめは此に原因するならんか

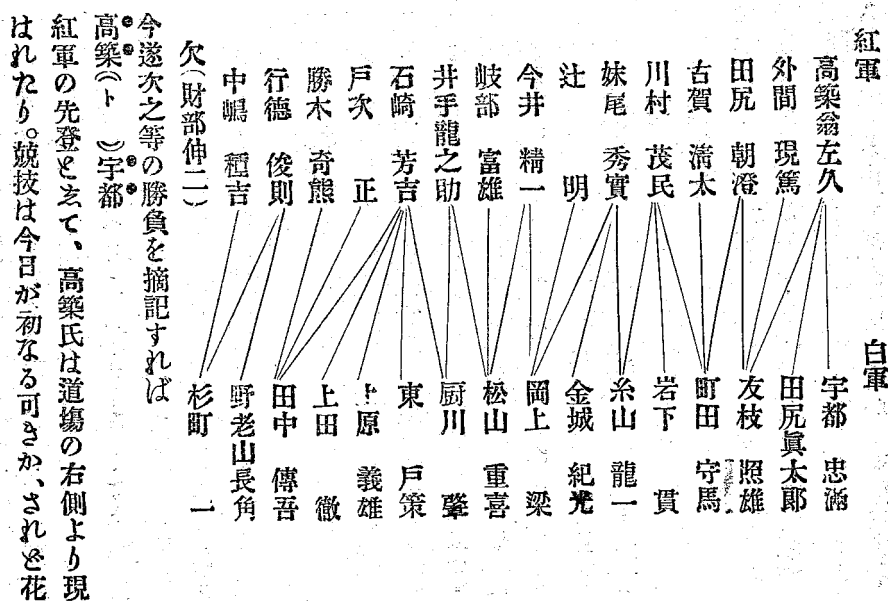
一、白軍の河野氏能く戦ふ田の池田氏と共に屢々敵を斃す此日のより日に投してアウトとなりしもの殆ど死者の半を過ぐ。

擊劍紅白勝負の概況

生事、野球も、擊劍もモトく、不案内に候得ば『よしの舍のあるじ』が、之に長じ居り候故之等の記事批評の如きは、この『あるじ』に一任せんと、かねぐ思ひ居り候處、不幸にも兩者の競争會、同時に催されまかば、よしの舍のあるじは、野球の方に脱走致え、其他の雜報子も不在の事故、生のみ残り居りては、如何なる災難もや降りかゝらんと考へ、逃げ隠れ居り候處、擊劍部委員も事務多端の爲、概況の報告出來ずとの事にて、或るえせものに探し出され、此記事をものせよとの嚴命に接し、泣く

く之を草々候。さりながら、もとく不案内なる外道の事として、古翫簾にてや造りたりけん、胴とやら云ふものを胸に當てがひ、座圍團を綴り合せたる如き、小手とか面とか云ふものをはめ、竿竹を以て互に抛擲する様を見ては、餘りの事に驚天きて氣絶する程の事に候得ば、まして之等の批評などとは思ひもよらず候。されば次に掲載せる批評の如きは、當るも八卦、當らぬも八卦、云はれ當らぬ方が本當にて候程に、何様の間違有るとも、深く御譴責有之間敷様、前以て御斷り申上置候也。

五月十七日午後二時半より、本部内に於ける卒業生送別會を兼ね、擊劔紅白勝負を雨天体操場内に開く、警察署、監獄署等の劍客を初め、銀杏城下に錚々たる名士二十餘人の來客有り、其他觀衆凡そ二百餘人、練兵場に東走西奔して、巧みに熱球を弄ぶ野球聯合試合と、南北相應きて、頗る盛大なりき。而えて其紅白兩軍の組合は則ち左の如し。



の顔はせ麗はまゝ、願がす應せず落附かへりたる様、けに平の敦盛卿が須磨の初陣の出立も、斯くやとばかり思はれけり。宇都氏も劣らず。今日こそは白陣の先鋒、いでや味方の血祭りにしてくれんと、悠然として出で來れり。此に雙方默禮を濟ます、立合に移る。此處を大事の場處と思へば、切先僅に三寸ばかりを交ひ、して眸と眸と睨み合せ、暫時が程は戦もせざりまが、高築氏の姿勢優然として、ひぐまず傾かざる處、宇都氏が稍俯けるに比ま、已に八分の勝は見えにけり高築(ト田尻)

勝負如何と瞳をこらえて眺め居たる田尻氏は、味方の先鋒が、あはれ一撃の下に打伏せられまを見るや、無念やる方なく、勃然座を蹴て現はれ出で禮もそこゝに、濟まえて、遮二無二に打込む太刀風の烈ま、あはれ花の武夫も今は散り果つべきかと思ひまに、高築氏もさるもの、宛然胡蝶の風に戯るゝが如く、右に飛び左に飛び、或る時は獅虎の如く猛然とまて衝突を試み、或る時は脱兎の如く前に現はれ後に蔭れ、陰見出後の妙、變化の奇、けに孫子が九天の上に動き、九

地の下に蔭るゝと云ふも、之なる可しと思はれけり。田尻氏は右に拂ひ左に薙けども、打大刀毎に空をきつて返へれば、怒りくるふこと宛然夜叉の如く、三面六臂の勇を振へば、高築氏は四面八臂の勇を以て之に應じ、何れ勝とも見えざりまが、田尻氏は撃一撃の間に弱り來り、終に高築氏が功名に歸しぬ。

高築(友枝(面胴))

味方の先鋒已に二人を斃され、白軍の旗色何となく醒め渡りたるに、友枝氏は悠然とまて現はれぬ。此醒め渡りたる白軍の旗色を挽回またるものは、乃ち此人にてありしなり、高築氏も、暫時が程は揉み合ひしが、前數度の戦に、疲れ果てたる後なれば、口惜くも遂に面胴に由て制せられぬ、されど其腕前態度の秀逸なるは、敵も味方も賞め羨まぬはなかりけり。

友枝(面胴)―外間

友枝氏は小兵なれども敏捷なり、外間氏は體の大なる丈大様なるが如し。友枝氏の體に足らざる所は、技を以て補ふ可く、外間氏の術の足らざる所は、力を以て補ふに足らんか、柔道は力七

分に術三分と雖も、劔道は之と異なり九分と云うは術にて勝を占むと聞く勝は遂に友枝氏に歸しぬ。

友枝―田尻(胴々)

友枝氏は受太刀か上手にまて、田尻氏は打太刀が得意なるが如き。殊に田尻氏は新手にして腕力と云ひ體勢と云ひ校内屈指の勇士なれば其勢の烈しきこと宛然麻理天の荒れたるが如く友枝氏の敗は呆氣なし

田尻(手)―町田(胴々)

町田氏は言ひ分なき劔士なり。田尻氏は少しく竹刀に力を用ひ過ぎるが故に、其打込む時毎に左右の胴を丸開となす癖あり、之故にか町田氏は屢々胴を試みしか遂に之を成功せり

町田(手)―川村(胴面)

町田氏必ずしも川村氏に劣れるに非ず。川村氏も亦必ずしも町田氏に優れりとは云ふ可からずされど既に三人を斬り伏せたる後なればにや、遂に勝は川村氏の掌中に歸しぬ。

川村(胴面)―岩下

之本回の勝負中、最も呆氣なき勝負なる可し。固

より人の伎術は唯一回の勝負を見て、立ろに評す可からず。然れども、余が見る處に由らば、此勝負の呆氣なかりしは、恐くは撃劔部委員の罪ならん。非か

川村―糸山(胴手)

術に至つては何れ勝れるや知る可からされども力に至りては確かに糸山氏の方勝れりと信ず之其勝を占めたる所以か。

糸山―妹尾(胴)

糸山氏は六尺に近き大男なり。妹尾氏は五尺足らずの小へうなり。其大小衝を失する處、糸山氏が力に任せて薙き立てゝあせり狂うて打ち込む様、妹尾氏が風に柳と秘術を凝らして防ける様等は、五條の橋の牛若丸と辨慶其儘なり。されば互にあだ打てのみにて疲れ果て、勝負もいと待遠なりしかば、審判官は一本勝負を命ぜたり。抑も妹尾氏は體小なるが故に胴を打つことと並々にて横面を打つが如く、最も便利を得たり。糸山氏も亦面を打つに都合悪しからず。然れども糸山が太刀を頭上に振りかざきて、妹尾氏を打とせんか、凡そ四五尺の處を斬り下さる可

からず。されば妹尾氏は十分に之を避くるの余裕有り。とは人々の惡評なり。されど妹尾氏が美事に胴を以て勝を占めしも亦奇と云ふ可き。

妹尾(面)面(金城)(胴)

身長の不均合なるは前組合と同き。然るに妹尾氏が面を得て金城氏が胴を得たるは不思議ならずや。或人解して曰く、妹尾氏は試合中絶へず右足を上げて蟋蟀の如く躍ぬる癖有り。(之氏が牛若丸の名を得たる所以か)斯く躍ね上がりて高く空中に在る時、金城氏は以て胴を試む可く、妹尾氏は以て面を試む可きと、之惡評ならんにも亦以て一説とて存するも可ならんか呵。

妹尾(岡上)(面)

牛若丸の名を得たる妹尾氏も、既に強敵二人を挫きたる後なれば、今は疲れ果てたりけん、飛ばんとせせず、躍ねんとせせず、無殘、岡上一滴の露と消へ了んぬ。

岡上(胴、手)——辻(面)

之亦好取組なり。體と云ひ術と云ひ、何れ劣れりとも見えず、暫時が程は受つ流まづ戦ひしが、辻氏は霹靂一聲氣合十分に岡上氏の小手を打ちぬ

されど之は淺きとて審判官の物言生し、再び居直つて打々と切り結びしが、岡上氏は辻氏の面を打つと見せて、電光石花美事に胴を打ちぬ。之を以て先の小手と打消し。之より改めて勝負を試みまが、胴と小手とを以て、勝は遂に岡上氏に歸せぬ。

岡上——今井(手面)

鼠地に紫の花模様を染めぬきたるネルの襦袢に淺黄に白を交へたる立縞の袴を穿ち、優然と出て來れる今井氏の武者振、敵も味方も喝采の内に之を迎へぬ。まことや其愛すべき處に、犯す可からざる威有り。畏る可く犯かす可からざる間に、亦親む可き所有り。岡上氏も亦連戰連勝の余勇迸るが如く、暫時が程は揉合ひしが、遂に勝は今井氏の掌に落ちぬ。

今井——松山(面、胴)

崎嶇律元とて其名に背かざる松山氏が、打ち下ろす松山風にもろくも花は散りにけり、

松山——(手、胴)——岐部(手)

松山氏は、土國の銚々たる小年劍客なり。岐部氏は、濟々疊にてさるもの有りと知られたる、岐部

將軍、而も擊劔は赤面なりしと聞く。されど長竹刀は初なるにや、打太刀更に法に戮はず。恰もナヲを以て鴨居を撃つが如く、面を撃てば金面と平行な、小手を試むれば肩に當り、露當る可き模様もなま。されど伎部氏は到底松山氏の敵に非らずとて、反つて委員を責むるもの有り。然り伎部氏に長竹刀を持たせむるは、大工に鍛鉄を命するが如きのみ。其れ然り。豈其れ然らんや。

松山―井手(面々)

松山氏が巍然とまて引春の如きに似もやらず、芙蓉の肅美なるが如く、端然とまて現はれ出てたるは井手氏なり。固より風采の優秀を以て、其術を上下す可からずと雖も、若し余をして忌憚なく之を言はしめば、松山氏の太刀は強けれども鈍く、井手氏の太刀は輕けれども變化多し、松山氏が一瞬を輸せざる能はざる所か。但し井手氏のせむく敵の肺に寄り過ぎる癖有りと見まはひが目か。

井手(胴)―厨川(面々)

之今日の手合中、最も面白き試合なる可ま。先つ雙方立上つて、切先三寸ばかり突き合はせたる

所、丈と云ひ、構へと云ひ、共に云ひ分なし。刃を交ふること暫時にまて、厨川氏の太刀は、電光石花井手氏の眉間に當れり、少頃あつて井手氏は美事厨川氏の胴を得たり。之より勝負となり、雙方共に一入の念入にて立合ひまが、井手氏は。切先鋭く厨川氏の面に打込みたり。されど此面は一本と云へば一本。短まと云へば又短し。されば此太刀を以て、此勝敗を決せんは殘念なり。之に由りてか審判官は無言に了んぬ。扱て之より又暫時刃を削りまが、井手氏は亦もや厨川氏の小手美事に斬落まぬ、野田審判官は勝負有りと宣言せり。されど中嶋審判官はいつかな聞き入れず。之が爲めに雙方亦もや居直つて立合ひまが、厨川氏の竹刀は井手氏の眞甲に當れり。能く止まつたり。然れども短かま。先皮が金面を離れざる程短ま。されど中嶋審判官は勝負有りと宣告せり。而まて勝は遂に厨川氏の掌中に歸しぬ。又厨川氏足下は果して此勝を以て満足せまか。此宣告を以て正當なりと考へまか。或人罵つて曰く中嶋氏偏頗なりと、噫之何の言をや。彼の中嶋氏は、無刀流の達人として名を天下に轟

かす人、區々たる。勝敗の如きは殆んど氏の眼中に置かざる所如何を偏頗なる審判を爲して、痴人の歡迎を貰はんとするものならんや。之を駁する人有り。曰く苟も競技を演ずる以上は、勝負を以て絶体的に眼中に置くの必要なきとするは非なり。焉んぞ公平なる判斷なくして可ならんや。と雜報子笑つて答へず。蓋し言者の頑蒙遂に之を啓く能はざるを知ればなり。

厨川(胴)——石崎(胴突)

掛聲と引上のはてやかなるには、本部中恐らくば此二人を推さざるを得ざらん。先づ第一に厨川氏の胴有り、次で石崎氏の胴有り。重ねて石崎氏の面八分を得、厨川氏面を以て又之に返へ之、第五回目の石崎氏の突は。少々輕しと、云ふ人有り。然れども勝は遂に其頭上に下りぬ。

石崎(面胴)——東

東氏が徹頭徹尾滑稽じみたる使ひ様、最も面白し。然れども久しく稽古を怠り之故か、竹刀の切先にふりきつたるに反し、石崎氏の意氣盛満、及頭雲を生すが如き石崎氏、物の見事に東氏を打ち伏せぬ。

石崎(胴手)——上原
石崎(胴々)——上田

石崎氏が連戰連勝の勢、宛然破竹の如くなるに、上原氏上田氏も、暫時が程は、受つ流しつ防ぎまが、無殘遂に頭を揃へて石崎氏が刃の錆となりぬ。

石崎(田中(手面))

勝負如何にと片唾呑んで控へ居たる田中氏は、腕とも肱とも頼みきつたる味方の僥將が、二人迄も斬伏せられしを見るや、無念やる方なく、いで味方の吊ひ戰、怨みの一刀、受けて見よやと云はんばかりに、切先鋭きく打ち掛りぬ。石崎氏は斬りし數人の返り血ならぬ汗に浴えて、宛然水を蒙りしが如くなれども、更にひるめる様もなく、死ぬならば共に冥途の旅連にせんと、稍暫時は驅けつ違へつ戰ひまが、血有り肉有る人の身の、何時迄が續く可き、次第く弱り行くに、一入氣を得し田中氏が、火水となれど打ち下ろす、太刀の嵐の風下に、あはれ石崎氏は梢の花と散り果てぬ。されど其効續手腕に至りては、敵も味方も口々に褒め羨まぬはなかりけり。

田中(面々)―戸次

斧鉞を以て草薙を斷つが如く、狼虎の群羊を驅るが如くなりて、僥將、石崎氏さへ、我打太刀に斃れたる。鬼にまれ蛇にまれ、物の美事に取ひしぎくれん。我と思はんものどもは、出て逢へや」と猛然とぞてッ立ちたる様、げに頼もえくぞ見ゆにける。戸次氏もさるもの、彼に樊會の勇有らば、我に關羽の勇なきに非ず。と憶する色なく立出でたる様、まづ勇々しかりけり。少頃て試合に移れども、雙方共に氣を吞んで、軽く動かず、虚を察しては進み實を察しては退き、一進一退、躡歩も忽に踏まず、動かさる時は山の如く、はやきことは疾風電光の如く、左に拂へば右に開き、右に薙げば左にかはす。打つかと見れば受け、受くるかと見れば打ち、天翔る鳥の如く、地を走る獸の如く、水火と爲つて戦ひし様、實に今回第一の勝負なりけり。斯くて押しつ返しつ戦ひまが、互に淺手深手を蒙ること屢、勝は遂に田中氏の掌中に歸せり。

田中(面、手)―勝本

勝本とは名のみにして、なかくに遠慮深く、い

つもく受太刀のみにて、此試合は面白からず。勝負終つて田中氏は、疲勞せりとの故を以て退場せり。

夫れ紅白勝負は、兩軍最後の勝利を爭ふを以て目的となすものなれば、従つて各人個々の勝敗に重きを置くは、素より必要のことなり。然れども自己の勝利名譽のみを顧みて、毫も全軍の勝敗に意を注がざるが如きは、大に非なり。之故に、荷も軍の一員たる以上は、卑劣に渡らざる迄は、徹頭徹尾力の有らん限り盡し、以て味方全軍の勝利を計ること、彼の野珠競争に於て、甲死するも荷乙を助くるの工夫を爲すが如くならざる可からざるなり。田中君足下、足下は果えて意を足下の味方たる白軍全般の勝利に用ゐるか、足下、若之を欲せしならば、何故に未だ傷かざるに退きまか、足下若之行徳氏の敵に非ずとするも戦ふて、之を疲らすは、足下か味方に對えて當然盡す可き職分なり。利益なり。戦に於ては、兩軍干戈相接するの時、戈を捨てて走るものは、其罪死に當る。今足下は前三回の試合に於て、必ず少か

らざる疲勞を感ぜざるらん。然れども若き意を全軍の勝利に注がば傷くとも尙進んで戦ふこと、其任務を盡せるものと云ふ可けん。而して敵は其勢猶猖獗にまて、足下に對し切りに戰を挑みしに非ずや。然るに足下は疲勞せりとの故を以て退場せり。足下は實に干戈相接するの時戈を捨て、走りしものには非ざるか。敵も人なり。君も人なり。固より鉄石不勞の魔力有るに非ず。されば、足下一人を以て敵の全軍を斃す能はざるは、皆人の知る所なり。足下の味方と雖、恐くは斯かゝる大任を以て足下の頭上に置かざりまらん。足下も亦自から之を知り居りまらん。然らば則ち、敵軍を鏖殺するは、足下が當然の義務に非ざるなり。又勝敗は固人的に非ずまて、總体的なれば、足下は足下に對する、一人の敵を斃せるを以て、其義務を果せりと云ふ可からざるなり。唯足下の全力を盡し、斃れて而て後止むに在り。敵を斃すと斃さざるとの如きは、固より問ふ所に非ざる也。然らば則ち何故に斃れずして止みしか。察するに足下は、既に三人の強敵を斃せ

るが故に、若其儘にまて之を止めば、全勝の榮有つて敗の辱なしと考へまらん。之大なる誤なり。全軍の勝敗を眼中に置かずして、満全なる固人の名譽を收得せんとする者なり。足下の味方に對し不親切なる、而も最も無視したる致方なり。今足下は恐くは多數の觀者か、口々に始めはやまづ有るならん、本誌の雜報欄にも亦時ならぬ花を咲かするならん、と豫期しつゝ有る可し。知らずや本校生徒の輿論は、足下を以て、箚にも棒にも掛らぬ腰弱者或は卑屈者とまて指彈しつゝ有るを。雜報子も亦、人身攻撃に似たれども、斯かる者の續出を恐れて、苦言並ぶる事斯の如し。さはれ、敵の勇將三人を斃して味方の衰運を挽回せし足下の功多からずとせず。此に并て云ふ可きは、兩審判官が、田中氏の退場するを見、空々漠々之を不問に附せまは抑も何の故なりまかを問はんとするに在り如何？

野老山一徳（面手）

昨年優勝に、中島戸次の兩雄を初め、本部の巨壁とまて、鬼將軍の名有る財部氏を、物の見事に

斬り伏せたる行徳氏と。現時本部の帷幕の將と
まて、采配を取る、野老山氏との試合なれば、嘸
かし面白からんと思の外、意外に呆氣なき勝負
なりき。

行徳―杉町(手面)

昨年の勝負に杉町氏の爲二度迄も足下に踏み附
けられ、物の見事に敗を取つたる行徳氏は、此處
ぞ怨の一刀、返さくれんど、縦横無盡に打ちかゝ
れど、杉町氏もさるもの、先年の勝負に、敵將を
首め、幕下の僥將、四人迄斬り、斃たたる英雄、而
かも今日は、白陣の御大將、何せう容易く參らる
可き、受けつ流さつ少々久まゝ戦ひひしが、無
念、行徳氏は又も反り打にされぬ。

杉町―(推倒突)―中嶋(面)

中嶋氏は紅軍の裨將なり。されど大將事故有り
て來らざれば、此勝負を以て紅白兩軍の勝敗を
決す可き、最後の戦争なり。さればにや、敵も味
方も觀客も、水を打ちたるが如くまじろきもせ
ず眺めまが、兩將も亦雙肩の責任重きが故か、輕
く動かす。精を懸らえて戦ひしが、丈と云ひ、術
と云ひ、格向と云ひ、是實に好一對の劍士なり。

杉町氏は、端那館裏、黒帶の譽高き柔道家にして
而も中嶋先生得意の體道を悟入せるもの、遂に
二度迄も中嶋氏を推し倒せまが、中嶋氏も亦其
間に面を得たれば、引分となり、紅白兩軍、遂に
勝負無しとなり了んぬ、

右勝負終りて、外來の賓客と、我が部員との寄合
稽古有り。一時間餘にきて、彼我の三本勝負に移
る。乃ち左の如き。(右下に來と書するは來賓な
り)

緒方 政久(來) 坂本 清夫(來)

辻 明 上田 徹

村岡 三郎(來) 中村 一龜(來)

相良 武雄 厨川 肇

松間 芳太郎(來) 高井 群内(來)

今井 精一 中嶋 稻吉

平岡 大平(來) 川下 雅次(來)

東 戸策 行徳 俊則

青木 彌四郎(來) 中嶋 正直(來)

糸山 龍一 杉町 睦一

平江 今彦(來) 前田 行藏(來)

金城 紀光 財部 伸次

野田 嘉八(來)

石崎 芳吉

○(村上 直彦(來))
○(野老山長角)

以上の勝負中川下氏と行徳氏との試合及び前田氏と財部氏の試合は最も面白き勝負なりき然れども之等の記事は余白なきと萬一批評の誤謬よりして高先生の名譽を毀ふが如き事有るを恐るゝが故に此に之を略す勝負濟して後一同に茶菓を饗し散會せしは六時頃なりき
扱て本日の上級者左の如し

行徳 俊則

糸山 龍一

田中 傳吾

町田 守馬

右二級乙へ

右四級乙へ

厨川 肇

梅田 三郎

上田 徹

山内

金城 紀光

岩下 貫

右右三級甲へ

高樂翁老久

中村 貞

右五級甲へ

田仲 忠良

右三級乙へ

尙ほ此に一言せざる可からざることば長尾部長

の欠席されたるに在りと云ふ

書し終つて讀一讀するに怪言奇句點綴疊糾し
乱文苦章加ふるに批評議論の正鵠を失するを
以てす多罪謝する所を知らざるなり

演說會概況

(演說部委員稿)

五月三十日本學年最終の演說會を瑞邦館に開く
當日は朝來の降雨夕刻に至るも尙止まず、爲めに通學生の來會者甚だ少かりしは遺憾なりき。
定刻午後七時なりきも聽衆の集まらざる例の如き、乃ち撃鉢二回午後八時に及んで慚く開會す

委員開會を報するや、『大日本帝國版圖擴張策』なる大演題を掲げて劈頭第一に現はれたる者を小林一男君となす。君登壇に先ち一幅の采色地圖を後への壁間に掲ぐ、題きて『第廿八世紀頃の日本』と云ふ乃ち壇に上り開口先づ得意の諧謔を述べて衆の顔を解き、それより本題に入り冒首我邦版圖を大ならしめんとするは其地域の相對的に小なればなりとて擴張の主旨を明かにし續て其の利を説き、一轉して我國民進取の氣象

に乏きを嘆じ、神功皇后豐太閤の事を引きて
慷慨一番し、家康の鎮國主義を罵り、日清戦争に
及び、再轉して臺灣統治策となり、皇恩の鴻大
無量なる事を知らまひれば土匪鎮服の如き必ず
しも難きにあらす云ひ臺灣一度治平に歸せば
之より愈々南洋に向て我鵬翼を延はすべしとて
圖に就き説を指點して之を説き、先づ呂宋助左
衛門以來最も關係深き比律賓を初めとて、バラ
ワン、ボルネオ等の南洋諸嶋を獲、更らに南進し
て南大陸北方一帯の地を略取え、之れより北方
に轉じて安南を降し、馬來半嶋を占領え、更らに
極北に於ては樺太を回復せざるべからずと策を
而て此の大擴張を成就するに必要なる二手段
は外交政略及兵力即ち是れと述へ其の軍備に應
ずるには、必ずしも苛税を課して人民を苦しむ
るを要せず、今日上下を通じて滔々沈淪しつゝ
ある奢侈の風を一變えて、質素朴の風を養成せ
ば可也と云ひ、世上或は軍備の擴張に伴ふ大軍
人及び戦争後の斡旋に當る大外交家ありやと嘆
息するものあるも、此の如き徒は自ら己を知ら
ず及己を悔るものいみ蓋だ自ら進んで大軍人大

外交家たらんとはせざる大喝し、最後に愈々
版圖擴張の事其の緒に就くに至らば、大久保甲
東の例にならひ、奏上まで都を日向に遷え奉り
未來永劫東洋の鎮たるを期すと結論せり。
第二席飯塚孝眞君、君は「イェリング氏權利競爭
論に就きて」なる演題の下に、余が此の演壇に立
ちて諸君の清聴を煩はすに至りしは、敢て此の
書の批評を爲すが如き大膽なる所業を試むるに
あらずして、唯此の良書を諸君に紹介せんが爲
めなりと述べ、凡そ世上文藝科學の書に乏まか
らざるも眞に世界的著述にまで、萬國俱讀の書
と稱すべきものは當今唯ベッカリア、サヴィタ、
及イェリング三氏の著を措て他にあるなしとて
此の書の價值を明かにし、それより、此の書説く
所は純粹なる法律理論にあらずして、寧ろ實用
的倫理に關すること多く、其の主旨とする所は、
人は嚴正に其の權利を防守して決て他人の侵
害を默容すべからずと云ふにありとて、之を五
項に分ちて精細に説明し、終りに臨んで彼の四
億の蒼生と無限の富源を有する支那帝國の國權
の振はざるは常に世人の怪む所なるも、一度其

の國民の權利觀念如何を觀れば、此の疑團は忽ち氷解せんのみと云ひ、我國を權の振はざるも、一賦當局者其人を得ざるに在らんも、其の最大原因に至るは實に國民が權利觀念に乏きに基せんばあらず、之れ余が茲に此の書を諸君に紹介して一讀を讀ふ所以なりと述べて壇を下れり。

次に「學生と宗教」なる演題にて、今北策之助君は壇に登りぬ、君は目下學生の墮落は眞に其絶頂に達せりと慷慨し、其の原因を以て全く外界の誘惑なりと斷じ、其の救済法としては學生に精神的教育を施すこと必要なりと説き、此目的を達するには信仰を基礎として安心立命を目的とせる宗教を以て其の最良方便なりとすとてスタインか、歐洲學生の宗教心旺盛なるを怪しみ問へる人に答へて「人智は限りあるものなれば、智識以上の事は終に信仰に依らざる可らず」と曰へるを引証と、それより釋迦及耶穌の性行を叙え、最後再び精神的教育の最良方便として、宗教を倫理に應用するにありと述べて降壇せり。

第四席三好泰太郎君演題を「國際公法上より列國平和會議を論ず」と掲げ、徐るに説き出きて曰く、凡そ國際公法上は於ける國際爭議の調和手段には、平和的手段とて(一)周旋(二)仲介(三)仲裁を判の三者又強制的手段とて(一)報復(二)報仇(三)平時の封港の三者ありと各之が説明を爲し、それより一轉きて、平和會議に提出されたる武備廢止と云ふ事に就ては、諸種の障害ありとて、政治地理に關する障害、國家の自主權に對する障害を挙げ、又よき武備制限の條約成るとするも、一國が内乱によりて存立の危險に陥りまとき及國際爭議の起りま時は如何にして其の平和條約を續行すべきと云ひ、國際軍隊の、到底實際に於て、組織せられ得べからざることを述べ、要するに、此度の平和會議は、國際法殊に戰時國際法に於て、多少の得る所あらんも、本問題たる軍備中止、又は廢止の如きは、是れ仲夏の夢のみと斷じ、此の如くその行はるべからざるを知りて、尙且つ爲されたる提議の裏面には、果して何等の秘密をか藏するるとて、述べて曰く、希土戰爭後獨英二國の間漸く親密を

加へ來れるに反て、露國は獨逸の親交を失ひ孤立の地位にあり、而て露國の財政如何を考查すれば其の歳入の過半は國業の收入に属すれば一旦事あるも、其の歳入は増加し難く、又其の國債の多分は佛人の手にあれば、露の開戦するは佛の賛せざる所也、此の如く諸國の理由よりて、露は英に抗するの力無え、然らば露國は其の從來の政略を棄て、英の意に屈從せざるべからざるか、之れ實に露國の忍ぶ能はざる所なり、此に於てか露帝は一策を案じ、今回の提議をなせ、萬國平和なる美名の下に、大國の名を失はずして、英國と協商し、以て其の慾望を恣にせんとするにあらざるや、と推斷せ、平和會議提出當時の英露の關係、及昨今に至り英露協商成りしこと等は、余が此想像を益々真ならしめんとすと云ひ、最後に協商と同盟は相去ること僅に一步のみ、若し英露の同盟にして成らんか世界の各國は其の蹂躪する所とならんのみ、吾人豈に緊禪一番せざる可けんや、と述べて壇を下れり。

第五席船田雄君、君は「メッテルニッヒ」の謬見、軍備と外交なる題下に其の得意の快辯を揮て。

先づ佛國革命以後歐洲の形勢を説きメッテルニッヒに就て述べて曰く、國力微弱にきて而かも廿有餘の異分子を結合せし憂外患交々至れる壞國を率ゐて、列強の間に介在せ、或は非那翁黨の主領となり、或はヴィンナ會議の議長となり、或は神聖同盟の黒幕となり、或は反動的運動の撲滅者となり、巧みに列國を翻弄して、唯々其の命を奉せしめ、壞國をえて能く九鼎の重を列強の間に致さしめたる、一英物を誰とかなす、是れ實に彼の有名なる奇相プリンス、メッテルニッヒ其人にあらざるやとて大に之を賞揚せ、以下は時間無ければ朗讀すべしとて草稿を取て朗讀し、渠の生立性行より諸家の渠に對する批評を擧げ、彼の主義とせし所は外に對し國威の振張を計るには兵馬の力を借らずして唯外交政略を鋭敏にし、内に對ては警察間諜を到る處に具備せしむるにありとて其の謬見を罵り、又壓制を行ふて一時の康安を得えは恰も是れ噴火山頭の康安のみと云ひて其の壓制主義を非難し、轉じて其の外交政策に移りヴィンナ會議に及び、同會議に於ける渠の伎倆を稱せ、又其の政策の伊太

利に成功きて、領地を増大せしは可なるも、これが爲め、一方には、露國に南下の口實を得せしめ他方には、壤をして中央獨乙に遠からせむると同時に、普をきて之に近かしめ、普をして他日獨逸統一の端緒を開くに至らせめしは、大失策なれど評し後ち壤をきて局面一變勢力地に墜つるに至らせめしものは一に渠が一の謬見を懷けるに基けり、謬見とは他なま渠が外國に對ては一に外交の力にのみ依頼せんとせ、毫も軍備を顧みざりて事なりと痛撃し、露普佛壤の平時軍備の兵員馬匹大砲の數を擧げて之を比較し、軍備外交相俟て初めて其の運用を全ふすべきを説き、最後に一層聲を勵まして曰く、我邦軍備擴張完成するに至らば軍備に於ては歐洲各國と對峙するに至らんも、此の軍隊の後援によりて外交場裡に大手胸を揮ひ得るの大外交家は果えて何處にか之を求め得べき、之れ吾人か杞憂の念無能はざる處也と論詰せり、

右終りて閉會を告げ、例により茶菓を饗し、快談數刻にきて散會せしは午後十一時半なりき。

柔道部大會概次

六月三日午後一時半より本部内卒業生送別會を兼ね組合勝負を本校瑞邦館内に開く此日中川會長は公務の爲欠席されしが職員には武藤本部長を初め兒島雜誌部長園教授其他伊形先生高木先生等の來臨有り外來の客とて星野、矢野、江口牛原等他流の師範及び其門人等にきて殊に彼の四大先生の門下に精をすぐつたる門弟子及び講道館の有段者河原、工藤兩氏を初め幕下の勁勇が我校勇士と勝負を爭ふことなれば目下多忙の時なるに拘らず觀者凡そ三百余人頗る盛大なりし第一に白川委員新任の挨拶を述べ次に戸張師範は講道館投の形第二教を講演され勝負に移りては二時を過ぐるこゝ十五分なりき武藤部長が勝負に移るとの宣告を下すや否や八木、村上の兩氏は雷の如き喝采を以て迎へられたり之より龍驤虎搏近來未曾有の大活劇を演ず今逐次之を記載すれば左の如き

星と書するは星野門人矢は矢野門人江は江口門人講は講道館師は師範學校牛は牛原門人なり

6m05 5m20 2m10 5m00 8m00 3m50 5m35 7m00 5m40 6m10 2m20 5m30

離 綱

引分	腰投送襷絞	足掃腰車	体落体落	掬投	巴投巴投	縱四方固	袈裟固 体落	釣込足縱四方固	大外刈送襷絞 体落	腰投 釣込足絞	一本勝負 脊負投	引分
師	師	師			講	講	師					
梶谷鐵之助 津田哲次郎	坂田武彦 常吉徳壽	緒方善太郎 石田光次	鶴見照雄 宜清	石川登喜治 松島敬藏	山永龍男 土屋某	中光千町 八田某	那須貞雄 百武泰彦	相良武雄 阿形輝司	西沼雄一 永沼秀雄	河野通博 堀口正文	福富千代馬 園田嫡男	八木義次郎 村上徳吉
三	三	二	二	九	八	七	六	五	四	三	二	一

一、鉢勢の釣合最も宜しく其に今日が初陣なれども更に憶せず
驅けつ離れつ揉み合ひしが勝敗決せず終に引分

二、之亦好取組なり園田氏が大腰福富氏の横捨身共に功を奏せ
ず雙方勞れたれば審判官は一本勝負を宣告しぬ間もなく園田氏
の脊負投見事に掛つて福富氏の敗

三、取組むや否や堀口氏釣込足にて軽く一本を取り次に堀口氏
が帶をつかんで腰投に行かんとするを河野氏踏み止つて反對に
腰投見事にきゝて一本を返し之より雙方切に勝負を争ひしが河
野氏が疲れたる所を捨身にてねじ伏せ絞めきまつて堀口氏の勝
四、西氏頻りに對手の体を崩さんことを勤む永沼氏其の足の亂
るゝ所を体落もて倒す永沼氏は膝車を得手とするものゝ如し西
氏は其の掛け外す所をすかさず横捨身を以て平倒にえその立つ
所を大外刈にて美事に倒さぬ

五、阿形氏相手の体の浮ふ所を横捨身を掛け其のかけ損せし所
を相良氏得たりと固む阿形氏降るこの時阿形氏の少しも起さん
と力めざりしは不満されど由來相良氏の力阿形氏に超えたりそ
の能はさるを豫知して潔く降り後に力を残さたるは良策と稱す
べからんか相良氏釣込足にて美事に倒し相良氏の勝に歸す
六、何れも豪力。百武氏横捨身にあやまちし所を那須氏固にて
一本とる。百武氏相手の体を崩きて体落にて一本とり、次に腰投
をかけたれども那須氏の重さにや堪へ兼ねたりけん半途にえて

8m10	8m	4m30	4m	10m50	10m	5m00	9m10	4m10	10m0	11m10	10m40	16m30
跳腰体落	引分	体落浮腰	巴投	体落	首固	足掃釣込腰	横四方固掬投	横四方固十字絞	首折小手挫	引分	引分	引分
小玉挫	大外刈	講林	講林	隆盛	野田	富米	西	田邊	坂本	講林	眞鍋	草野
牛	製装固	貼川	北島	林	德屋	菊池	杉町	副島	松隈	甚五右	氏原	上妻
阿部直太郎	中村	大野	渡邊	泰吾	某	剛太郎	光雄	彌平	三郎	工門	五男	博之
云	蔵	全祐	寛人	三	三	云	元	云	七	云	云	云

諸倒となり之は残念。力も業も共に好敵手相攻め相禦さて終に引分

七、中光氏は横捨身小外刈を得手とす。八田氏は巴を得手とす中光氏の横捨身軽く一本とりしも無採用八田氏巴を以て攻め立てしも足の位置遠きに過ぎて無功八田氏は中光氏の横捨身に損せ之所を固む中光氏困難の末終に起く。中光氏再び横捨身を掛け損じ八田氏固を以て終に勝つ

八、土屋氏は初陣なり山永氏は老将と見しはヒガ目か禮終つて立上るや否や巴投を掛けたる山永氏の手ぎわは感心土屋氏にとりては残念至極なり之より居直りて共に一層心を用ひ暫時揉み合ひまが再び巴投を以て勝は見事に山永氏に歸しぬ

九、石川氏体落をかけんとする所を松嶋氏すかさず掬投にて一本とる。石川氏巴投に仕損せ之を松嶋氏押へ力を極めてこれを絞めまが懨の取方余に淺きに過ぎて無功。松嶋氏小外刈をかけた体の前に傾く所を石川氏決意脊負投をかけたれども輕之引分。

十、術と云ひ跡と云ひ最も似合ふたる組合なり友枝氏は押へを得手とすれば屢々自から倒れて誘へども鶴見氏の炯眼敏とく之を見破ぶつて其手に乗らず兎角する内に鶴見氏の体落見事にきまつて一本。居直つて再び組まんと之体の姿勢未だ調はざるに乘じきたりや体落にて鶴見氏の勝は奇麗なりと

十一、石田氏は巧に相手の体を引き崩し腰車にて美事一本とる

5m 脊負投脊負投 矢 鈴木 四郎 吉

7m20 引分 約込腰 池田 嘉吉 元

12m50 (小外刈抑込)合臺本 江 岸川 太郎 元

8m50 引分 矢 橋 戸澤民十郎 吉

9m30 脊負投体落 足 拂 江 町野 某 三

11m0 脊負投 左跳腰星(講) 宮崎 祐助 三

14m20 引分 星 講 河原彌太郎 三

緒方氏も一刈に刈り倒さんと大外を掛けられども能はず。緒方氏は防守的になり石田氏は進取的となり進んで足掃にて緒氏を制し勝となる

十二、常吉氏横捨身にて損じたる所を坂田氏固む力余りすぎて坂田氏の体重の大部上部に移れるを利用し常吉氏これを反えたるは頗る巧なりき常吉氏横捨身をかけ坂田氏を押へんとす坂田氏屈せず下より常吉氏を絞む無効即ち立ちあがり常吉氏の体の定まらざるに乘じ腰投にて美事一本倒す

十三、津田氏は腰投を得手と云梶谷氏は足掃を得手とし共に進取主義にきて共に防禦に巧なり引分

十四、上妻氏は草野氏を組伏せんと試みえも無効草野氏巧に相手を釣込み之を脊負ふ上妻氏上部の力を殺きて下部にうつゑた

十六、結川氏体大く林氏は比較的に小。林氏意氣込む。此大の男美事に投伏せんとするにあり。林氏大外刈を掛け無効、相川氏が足掃に損じたる

所を林氏大外落にて倒す。林氏は飽く迄も業を以て倒さんと云相川氏は豪力を以て一揉に揉み

伏せんとす林氏大外刈を仕損じて倒れたる所を相川氏最も堅固なる縦四方固にて固めたり林氏起つ能はず。引分

十七、坂本氏巧に後につき松隈氏をすくふ輕し。

十五、眞鍋氏足車を掛けしも無効眞鍋氏原氏体落を掛るも又無効上原氏谷落を掛け無効、眞鍋氏跳腰を掛け無効上原氏腰投をかけえも頗る輕之上原氏谷落を得手とす終に引分

松隈氏体の傾く所を脊負はんとして得ず諸倒となり坂本氏之を縦四方固にて固む變えて松隈氏の上に乗り絞めんとす松隈氏これを防がんが爲めに腕を押す坂本氏之を利用し腕挫にて一本とる松隈氏の防禦法感心せず。松隈氏は坂本氏の体の傾く所を決意脊負投にて一本投げたり松隈氏は又もや脊負投を試みしくじつて押へられ坂本氏松隈氏の兩股に割込み襟をとつて五六回地に舂き疲れしめたる上にて推掛り首挫にて勝は坂本氏に歸す

十八、田邊氏は骨格遙くして力強し専ら裏投、押を得手とし副嶋氏は之を刈り倒さんとしたれども誤つて押へられ田邊氏之を絞めて一本を得。副嶋氏は相手の豪力の爲め防禦に頗る困難し遂に田邊氏の固むる所となり田邊氏勝つ

十九、西氏巴を掛けんとて倒る杉町氏之を固む西氏強力之を反す西氏立ちながら之を絞めんとす能はず諸倒となり杉町氏下になり西氏之をすくはんため自ら之を起し杉町氏の起つ所を西氏すかさず之をすくふ其術や巧なり次に西氏再び杉町氏をねぢ伏せ横四方固にて一寸も動かさ

ず西氏遂に勝となる其力や恐るべし
二十、何れも榮手なれども菊池氏常に攻勢を取り富米野氏は守勢に陥りまやうに見えたり。菊池氏折々相手を崩さ出掃足にて一本取る、富米野氏足掃を以て之に應せしも功を奏せず、菊池氏相手の進み來るを利用し之を引きて相手の体を浮かし釣込腰にて一本取り、菊池氏の勝となりぬ。

廿一、徳谷氏巴に失敗えて押へられ野田氏膝車を掛けまも効なく野田氏の体の崩るゝ處を徳谷氏把をかけたれども失敗し、野田氏之を押え首曲絞めにて一本取る、野田氏大外刈を掛け徳谷氏を倒せしも輕くまて無効なり一本勝負にて野田氏勝つ。

廿二、林氏先つ押にて勝、中村氏敵の足の亂れたるに乗じ体落をかく頗る輕し。次て林氏体落にて一本取り勝は林氏に歸す。

廿三、渡邊氏横捨身に失敗えて押えられ、北島氏は脊負投にて倒れたれども已の体と同落にて取らず、渡邊氏の押し來る處を北嶋氏隙さず巴投にて美事一本とる。

廿四、互に隨をねらひ、大野氏先づ腰にて一本とる、平田氏は足車足掃にて攻めまも無効、その足掃にて損えたる處を大野氏体落にて勝は大野氏に歸しぬ。

廿五、於保氏は腰投にて當り中村氏は脊負にて當り互に臆せず争ひしも相防ぎにて引分、中村氏の脊負は縦脊負たるを以て例令脊負ふても相手を投ぐる事難し。

廿六、阿部氏巧みに相手の体を崩し高瀬氏の力を右にはづし同時に体落にて一本とりまが之より阿部氏下に組み敷かれ高瀬氏は乗りかゝりて絞めむとす阿部氏之を防がんとまて腕を延すや高瀬氏腕挫にて一本とる。高瀬氏は専らじはんとまて連りに後に回らんと力む、阿部氏之を看破し其防禦頗る力む、やかて高瀬氏の体少しく前に傾き其体力上に移り腰に隙の生ずるを見るや阿部氏すかさず跳腰にて美事一本跳ね飛きたり。

廿七、福田氏は矢野流の業手なり、鈴木氏体落膝車等にて之に當りしも皆功を奏せず、福田氏脊負投二度功を奏えて勝は同氏に歸したり。

廿八、体格といひ、業といひ此上なき好組合なりし。双方とも体の作りに困りしか、池田氏先づ得意の脊負にて釣込み將に落さんとする處を戸澤氏巧みに体を變えて逃れたり、之より戸澤氏釣込腰にて一本とり、池田氏亦体落にて軽く倒ま、又互に大外刈にて争ひまも勝負なくして引分、

廿九、小野氏小外刈にて軽く投げしも採用せられず岸川氏脊負をかけしも無効、小野氏押にて一本とり、同氏の勝となる。

三十、椿氏は把を得手として屢々用ひまも、無効足の位置余りに遠きが如ま、戸澤氏數々其押ふる處となりしも能く返して引分となる。

卅一、町野氏は江口流の業手と聞きぬ、白河氏また我校の勇將意氣共に滿盛、町野氏は得意の脊負投足掃を試みられしも無効少頃にして白河氏の脊負投見事に厥つて一本又居直つて組合ひまが町野氏足掃にて一本返ま之より勝負となり一上一下桃みあひまが如何したりけん白河氏の体落見事にきまつて勝負あり。

卅二、鉢の大小衡を失して到底宮崎氏が工藤氏

に勝つの見込なかりしか如し殊に工藤氏は講道館初段にて名を銀杏城下に轟かせる人なり、されど宮崎氏は体を小なれ吾校帷幕の驍將、而も脊負投を以て勇名龍南に高き、されは工藤氏も注意に注意を加へて組み合ひえが忽ち例の脊負投にかゝりて見事に一本とられぬ、之より工藤氏愈々戒慎を加へ一進一退頗る用心をなすか如き有様なりしが工藤氏右腰にて一本とり、勝負となりしか双方とも之より互に守勢をとりて終に引分となりぬ。

卅三、河原君も亦講道館初段其名を熊城下に擡にせらるゝの人、小河氏は吾校の小天狗風に鉤込腰の得意を以て著る、相對する處体といひ構へといひ實に好對の勇士挑戦十余分互に秘術をつくまて組合ひしが、勝負容易に決せず、いつ果つべくも見えざりければ終に引分となりぬ勝負茲に終る、時既に六時を過ぎ日金山の頂に落ちんとまて色、握舟の如く、龍南の天地異形を放つ、之より黒帶授與式にうつり、右終るや武藤部長立ちて開會の辞を述べらる其要曰く
凡そ物研鑽を經すんば進歩せず彼の長を取り

此の短を補ひ茲に始めて事物の進歩を見るべ
ま今日此他流聯合試合を開きしもの亦此の目的に外ならず諸君此意を誤る勿れ、然りと雖も余に尙一事の言ふべきあり、何ぞ、武術を鍊るは乃ち武士道を磨くなり、術達すとも此道を忘れなば寧ろ學ばざるに如かず、禮を以て争ひ、義を以て闘ふ此れ君子の争也、諸君須らく君子の争を期せよ

右勝負終つて昇級式を行ふ偕今回昇級者及編入者は乃ち左の如し

小河 愛吉 宮嶋 祐助

右三級へ

松隅 三郎 中村 隆盛 田尻 朝澄

安藤作太郎 福嶋 尙純

右五級甲へ

草野 鼎 眞鍋 五男 石田 光次

納富 陳平 小林 一男 八田 千町

岩永 巖 鮎川甚五右左門

右五級乙へ

金谷 忠路 井上 圓吉 河形 輝司

林井 鬼二 成瀬 周治 永田 興吉

園田 嫡男 鶴兒 三三 八木義三郎

諸富 馨 福富千代馬 河原

城戸 貝原 良介 相良 武雄

右六級甲へ

勝正 憲 深水 文質 村上 徳吾

戸川 霽見 萩原玄太郎 吉富 惠

右六級乙へ

右終りて例の如く茶菓の饗あり主客膝を交えて
快談數刻全く散會せしは蒼烟郊廓を蔽ふ、歸鴉
林に鳴くの頃なりき。

此に云ふべきは慈惠天の如き會長閣下の寄附に
より各勝者に満足なる賞品を與ふるを得たるは
吾人の感謝にたへざる所なり

(附言)無思慮無教育なる輩が輕忽にも單に勝ち
さへすればよと云ふ早合點をなせ卑劣極ま
る陋手段を以て一時の勝を僥幸せんとするは
實に危險の至なり若し吾人有望の學生にきて
不幸にして体を傷け身を毀ふが如きと有らば
是實に愈々しき大事なり吾人は決て彼の壯
士車挽等に伍し身と望とを犠牲にして是等の
勝負を爭ふ能はず此に於て雜報子一つ建議案

有り曰く他流試合は好じされど之に學生のみ
と云ふ一制限を設け彼の無思慮無教育にて
身体の貴重なるを知らざる輩はたとへ申込有
ひとありと雖も決して之を承諾せざるにと云
ては如何

尙は一言す可きは此記事の中組合勝負の批評は
多く柔道部委員宮崎祐助の手になれるに在り
聊か附言きて其勞を謝すと云爾

第三回懇話會略況

今也熱濕の氣東南の地より來たり懽氣荐りに人
を襲ふの時に當り、獨り活氣舊に仍りて汪湧着
々歩武を進めて休まざるものを、實に在寮法科
生懇話會となす。創立以來、既に二回の討議會を
開きたることは嘗て紹介せし所なるが、今又五
月十九日午後八時より其第三回を瑞邦館に催し
『徳川家光瑣國政策の當否』てふ論題に就き大に
議論を上下せり。先づ出題者の説明あり之に對
する質問應答殆んど一時間余の久まきに渡りた
る末、討論は柳川君の積極論にはじまりて大崎
君の消極説に終れり、其間平山、高橋、江口、勝、
山田等の諸辯士各々特得の辯を鼓ぎ、或は賛ぎ、

或は駭き、入りつ、亂れつ、龍奔、虎躍の活劇を演ぜり。中にも眉目秀麗の柳川君が鋭尖上品なる口調と、朗爽快暢の辯舌とを以て一昂一低の語法を用ひ、或は例をあげ、或は証を引き、或は情に訴へ、或は理に諮ひ、滔々數千言大に滿場の喝采を博せたるは、狀貌魁偉、骨格強大、何となく武藏坊の御母影ありとの評ある大崎君が雷の如き音吐、豪宕なる態度、熱實なる言語もて、最後の論告者として縱横の詭辯を弄せたるは、兩々相對して當夜の一奇觀を成せり。其他平山君の豪放にして瀟灑なる、高橋君の滑脱にして俊爽なる、江口君の明快にえて縝密なる、勝君の沈靜にえて秀整なる、山田君の眞摯にして精微なる孰れも各自獨個の風をなし論壇場裡に一種の光彩を添へたるは吾人の多とする所、其所論の如きも秩序整然、耳さへ傾くに足るものありとも、一々其詳細を載する能はざるを遺憾とす、會衆凡そ五十名、仍例討論終りて茶話會に移り、時辰十二時を報ずるに及んで漸く散會せり。

(公眼子投)

第四回右寮法科生懇話會概況

六月二日午後八時より第四回懇話會を瑞邦館に開く論題は『我國は目下支那問題に對して分割主義を採るべきか保全主義を採るべきか』なり古橋君は先づ議長席に着き述べて曰く本會は創立日尙は淺きも益々隆盛に赴くは吾人の大に喜ぶ所なり然り而て吾等三年生は今や十數日にして諸君に別れんとす誠に眷々の情に堪へず願くば諸君益々奮勵し本會をえて校風刷新の一大源泉たらしめられんとを云々と終りて船田君討論題提出の理由を述べやがて席を保全方に轉え分割論を攻撃して曰く反對論者は種々の謬見に陷いれり徒に目前の利に迷ひ永遠の大計を圖らず全く支那人を誤解するものなりと論し支那人の忍耐、敏捷、四億の民衆、四百の大州決して侮るべからず一旦施政の方針を革め教育の方法を變せば一躍えて世界の最強國となるべし今や着々として進歩開明の域に進みつゝあるは是れ明に開明の潮流に一足を投せるものなりと稱賛し再び反對論者を目え輕躁暴論を好むものなりと呼び未だ一藥を投せずして救ふべからずと論するの庸醫なりと斷き更に進で英露の印度に於け

る形勢よりして兩國の到底協商する能はざるを説き兩國の力は決えて東洋に於て一致せずと論じ滔々數千言例を挙げ理を説き懸河の雄辯を揮ひ聽衆をして快と呼はせむ壇を下るや否や分割論の先鋒山田君は突如として壇に上り切りに前論を駁し支那人民の國家的觀念なきを論じ英露の對東策を説きて前論を難じ保全策は萬國同盟の上にあらざれば行ふべからず然れども之れ決して能はざる空想なりと斷じ埃及の例を引きて之が證明を爲え遂に我國は是非とも分割に力めざるべからずと結論せ其説く所頗る明晰なり次に保全論者柳川君は人種の異同より説き起し白人の專横を憤り保全策を主張し支那亡びなば日本は孤立すべしと叫びて壇を降る次に例の愛嬌持なる大黒然たる平山君は例によりて例の如く先つ前論者を眼孔小なりと嘆じ宜しく世界の大局に眼を注ぐべしと論じ日本の進歩の速なるより我國民の腦髓を世界第一等なりと自讃し支那國民の頑迷は正に救ふべからざる我國は之が主となりて分割すべしと論えて退く其論する所必ずしも價值なきにあらざれども何となく嚴格を

欠くの嫌あり今少しく眞面目らしく語勢を附てはしきものなり次に再び顯はれ出でたるは一驕當千の船田君分割論漸く勢を得て保全論如何にも危く見えければ此處一大事と一生懸命先づ前論を續けて愛親覺羅氏の無能力を以て支那現狀の最大原因となし其罪は國民にあらすと論じ續て英露各國の形勢を述べて曰く英國は印度叛亂の内憂あり又戰時に際してはスエズ運河を通行する能はず此等の不便よりえて英は到底東洋に充分なる兵力を送ること能はずと説き或はシュレヌウィツグ、ホールスタイン問題を引き或は露土問題に溯り滔々として雄辯を揮ひ次に露の形勢を論じ其虛無黨、或は經濟上の諸點より亦兵力を東洋に專にするを得ずと論斷せ一轉して分割は害多くえて利寡きを説き遂に結論して曰く況んや千歳以來の朋國今一旦自己の利益なりとえて何の顔ありて彼の隣むべき老帝國を分割するに忍びんや吾人は利益の上より正義の上より斷乎として保全主義を執らざるべからずと絶叫せ光焰萬丈其勢當るべからず時に双頬微笑を湛えつゝ一枚の洋紙を手にせ悠然とえて分割席に就

く是れ即ち高橋辯士なり吾聲明晰徐ろに説き起し支那國民の全く利己主義にして眼中國家なく其生活全く社會的なるを説き歴史上より優勝劣敗の野蠻國なりと論じ革命は支那の生命に於て今日の事狀必ず革命を要すれども列國の勢にて決して革命を起すに遑あらず已に革命なまどすれば其自滅分割に終る實に止むを得ざるなりと論じ次に日本人の力到底保全策を採り以て列國の分割に對抗する能はずと説き速に強國と共に分割の利に與かるべまど結論せり其の敵を攻撃る自己の論據を立つる所眞に好辯士たるを失はず是に於て分割論益々勢を得保全論大に衰ひ一人の起て之に應ずるものなし乃ち引き續き江口豪將は堂々として壇上に顯はれたり其説く所曰く支那は頻死の老人の如き到底救ふ道なし曰く支那を分割する必すしも兵力の強大を要せず現今已に分割しつゝあるにあらずや或は曰ん我國の獨力若し保全を能くせざれば他と協力て之に勉むべし是れ夢のみ彼の日露協商、日英同盟是れ皆一時の夢のみと論し曰く何、曰く何と縷々數千言或は朗讀し或は叱咤を遂に叫んで曰く

歐洲列國は今や汲々とて支那分割を力む吾人何ぞ獨り安臥するを得ん宜しく進で大に之が分割を力むべま先づ始に福建を取り次に江西、湖南の諸省を略し我國の文明を輸入し以て世界の上に睥睨するは是れ豈吾人の最大急務ならずやと驟然とて座に復す時に一人の從容として保全席に就くあり顧みれば何ぞ圖らん前の分割論の驍將山田君ならんとは衆皆其異なるに驚く曰く日清戰爭以來國歩日に艱難今や將に列國の爲に分割せられんとする彼老帝國に對して吾人豈一掬同情の涙を灑がざらんやと其言切々とて聽衆の同情を求め更に分割論者は野蠻人なりと論じ支那人の有望なるを述べ人爲の國境は到底久ましく續くものにあらず故に分割すども決して其儘に安ずること能はずと説き英露の目的は土地にあらずして商業上の利益なるが故に保全は左程困難ならずとて其局を終へり時に時辰已に十一時に近し議長乃ち時論終始を告げ閉會を團樂の間菓子とラム子にて腹を肥え互に胸襟を披きて讀し或は膝を交ひて論するあり或は手足を顯はて力士を氣取るあり各自充分の歡を盡

して茲に本學年最終の懇話會は偉大なる抱負と永遠なる目的を残して逝けり嗚呼進めよや懇話會進めよや爾の責任愈々重く爾の職務益々大なり進めよや進めよや

龍南會端艇部規定

第壹條 龍南會々員ノ外乘艇ヲ許サズ

第貳條 乘艇セント欲スル者ハ乘組員連名ニテ

當日午前十時迄ニ委員ニ申出デ乘艇證ヲ受取ルベシ

但休日ニ乘艇セント欲スル者ハ其前日正午

迄ニ右ノ手續ヲナスベシ

第參條 乘組員ハ五名以上タルベシ

第四條 乘艇希望ノ組數艇數ニ超過スル時ハ抽

籤ヲ以テ之ヲ定メ時機ニヨリ時間ヲ制限スル

コトアルベシ

第五條 乘艇者ハ乘艇前ニ乘艇証ヲ艇庫監督者

ニ渡シ橈架ヲ受取ルベシ

第六條 乘艇者ハ乘艇証所定ノ端艇ニアラザレ

バ使用スルコトヲ得ズ

第七條 履物又ハ土足ノ儘乘艇スルコトヲ禁ズ

又艇中ニハ履物ヲ入ルヘカラス

第八條 乘艇者ハ端艇ヲ艇庫ヨリ出ス前、端艇

及橈、橈架等一切ノ附屬品ニ破損ノ有無ヲ檢

シ若シ異狀アル時ハ直ニ監督者ニ其旨詳細ニ

申置クベシ

第九條 端艇及諸附屬品ヲ損失シタル時ハ翌日

午前八時迄ニ委員ニ申出ヅベシ

第十條 前條ノ場合ニ於テハ事情ノ如何ニ關セ

ズ乘組員ヲシテ實費ヲ半額ヲ辨償セシム

第十一條 漕艇時限ハ委節ニヨリ之ヲ定ム

第十二條 漕艇區域ハ艇庫ヨリ下流上下江津湖

ヲ限ル

第十三條 區域外ニテ漕艇セント欲スル者ハ特

ニ委員ノ許可ヲ受クベシ

第十四條 漕艇終レバ端艇及附屬品ヲ清潔ニ洗

滌シ置クベシ

第十五條 漕艇終レハ端艇及附屬品ヲ艇庫中ニ

整理シ其旨艇庫監督者ニ通知シ橈架ヲ渡シ乘

艇証ヲ受取り翌日午前八時迄ニ委員ニ返戻ス

ベシ

但旅順號及大連號ヲ使用シタルモノハ所定

ノ所ニ繫ギ附屬品ヲ艇庫ニ整理スベシ

第十六條 貴重ナル所持品ハ自ラ保管スルカ又

ハ發艇前特ニ艇庫監督者ニ預ケ置クヘシ若其
手續ヲ經サル物品ノ紛失スルコトアルモ艇庫
監督者ハ其責ニ任セザルヘシ

第十七條 各部ニ於テ競漕會ヲ催ス時ハ其部ニ

限リ五日間以內端艇ノ使用ヲ許スコトアルヘシ

但一週間前ニ申出ツヘシ

第十八條 遠航ヲ爲サントスル時ハ乘組員名目

限及目的地ヲ定メ二週間前ニ委員ノ手ヲ經テ

部長及會長ノ許可ヲ受クヘシ

第十九條 前各條ニ違背シ又ハ不都合ノ所爲ア

リタルモノハ一週間以上一學年間以下乘艇ヲ

停止ス

第二十條 當部ノ都合ニヨリ臨時漕艇ヲ停止ス

ルコトアルベシ

以上

計 音

青雲の志を抱きて、來て白水の邊に學を修めつゝありしが、一朝二豎の犯す所となり、其郷に歸りて療養怠りなかりきも、命數定まる所なりけん。根を呑んで黄泉の客となりき我が一學友あ

り。これを沖繩縣出身法科二年生小祿惠芝君とす。沈毅にして才氣人に超へ、實に一縣の望を屬せし所なりしと聞く、而えて今や空々く地下に在り、嗚呼悲哉。

學年試驗來れり

霖雨濛々とて杜鵑一聲を洩すの候、正に是れ龍南學寮の燈火が、時ならぬ星かと疑はるゝの時なり。三年生の學年試験は、十六日にはじまりて二十二日に終り、二年一年の學年試験は二十三日を以て舉行せられ三十日を以て結了せられんとす。學寮に於ては、十日より本學期中點檢をやめ、消燈時間を十二時と改められぬ。今やまさに學生の麥を收めんが爲に利鎌を研ぐの時、其の多忙また思ふべし。健在なれや諸君、勉めよや諸君。

夏期休業將に來らんとす

一時間の勞を養ふに十分の休憩時間あり、一日の勞をやすむるに一夜の睡眠時間あり、一學期の勞をやすむるに春季冬季の休業あり、一學年の勞を慰するに夏季休業あり。而して此樂しき夏季休業は、今目前にあり。一躍試験の難關を越

はんが、青山あり、白水あり、明月あり、又清風あるなり。實にこれ、此世ながら仙境なり。越えよ奮勵一番試験の難關を。越えて汝の欲する所にゆけ。行て一年の勞を慰せよ。汝の身体を健やかにすると共に、又所謂浩然の氣を養へ。

炊事委員長の改選

第廿六回の自炊は本月十五日を以て了るよつて本學期の炊事委員長改選は行はれたりその結果左の諸氏當選せり

會計長 (再) 吉國 兼三
購入長 (再) 津田哲二郎
保管長 (新) 平川 泉吉

分列式

六月十日午前十一時草苅々たる鍊兵場にて分列式は行はれぬこれに臨まれまは中川校長をはじり松本教頭沼田大尉各中隊、中隊長の指揮の下に肅然として進み凜然として歩む規律整齊行動活潑嗚呼此の氣風は實に我が龍南の健兒が永く維持すべきものやよ六百の同窓七旬の夏休に爾の体を鍛ひ爾の神を養ひ再び來つて復樂しく兵を鍊るの時を期せよ

さらば我愛すべき鍊兵場よ。我をばらく爾と別れむやよ苅々たる夏草よ、なれが心のまゝにいや深くしけれ我等が再びたちかへりこんなまでやよ月よ星よ我が學寮の燈きえなん時てらせこの鍊兵場の千草の露をやよ草よ露よ鍊兵場よ我はしばらく爾と別を告げんやよ月よ星よ我爾にこの愛すべき鍊兵場を爾にあずけん涼風吹き渡らなんその秋の初まで

學寮會

去る六月六日午後六時より學寮會を職員食堂に開く來會者四十余人黒本舍監并に學寮掛員能勢伊形中島の諸先生臨席され先づ第一に會長船田一雄君立つて本會は學年試験切迫したると議す可き事件無きが爲めに越權ながら舍監と相談の上五六月の學寮會を休會する筈なりまも生憎一事件起れるが爲に之が討議を爲すと室長送別の爲に遂に之を開會することに決またる旨を述べ之より數件に就きて熟議を懲らしたる後室長の送別茶話會に移り黒本舍監は送別の詩(文苑欄内に掲載せり)を朗吟され茶菓の饗應あり十分の歡を盡して散會せまは十時過なり